



医と知の航海

監修：永井良三

編集：自治医科大学総合教育部門

A5判 356頁 西村書店 2016年7月

定価(本体1,600円+税)

[ISBN: 978-4-89013-464-9]



自治医科大学の教養教育を担当する教授陣を中心とした教養的知識にまつわる一流の執筆者による、これから医師、医療人として活躍する学生たちにそれぞれの想いをこめた著書である。同大の永井良三学長による歴史的俯瞰「医学と学術」に始まり、「哲学」、「心理」、「進化」などなど、13のテーマで構成され、医科系大学や医療系専門学校の学生に、専門知識とは別に身につけてほしい教養、「知」を伝えるものである。

現代社会は、デジタル技術の幾何級数的(exponential)な進歩によって新しいパラダイムを迎え、激変しつつある。世界はどこへ向かうのか、なかなか見えない。これがこの十数年にわたる「グローバル世界の不安定化」の底流にある。

今後、多くの仕事が、人工知能などのデジタル機能によって置き換えられる世界になる。社会、政治、企業などの枠組みが変化し、医療人のあり方も大きく変わっていくだろう。しかし、医師、医療人の仕事には、デジタル的進歩を受け入れて、新しい教育手法を学び、取り入れ、自分と患者も含めた一人ひとりの人間にとってより良い選択肢を見つけ、その中から最良の道を選び取る、最終的にはアナログな側面をもって判断する「心」、「思いやり」などの素養を持った人格の形成は必須の要件なのだ。

その時に必要なのは、基本的な「デジタル化された知識」ばかりではない。これを磨き、長い歴史に裏打ちされた人間の叡知、知恵と融合させ、さらには、それらを臨床の「場」での実体験から学び取り、活かしてもらうところにこそ、医学教育の基本がある。

機械論的、科学的な講義に偏りがちで、より深く、真剣に学生たちと十分に対峙してこなかったところに、現在の日本の高等教育の教育者、組織、そして

行政と社会の弱さがある。グローバル時代が進むにつれて、高等教育の場である日本の大学は、世界の中で魅力と輝きを失いつつあり、科学研究の面でも凋落の兆しが明らかになりつつある。医学教育も例外ではない。「内向き」と言われる若者たちは、自分たちの先生を映しているのであり、社会のありさまを映している。

医学教育も、欧米の大学も、この二十数年で大きく様変わりしている。大学の教育のあり方は、デジタル技術のおかげで相当に変化している。MOOCなどは教育のあり方に大きなインパクトを与え、世界の一流大学の授業に参加することも可能になった。日本の医学教育はどうだろう。日常の教育の場は、どのように学生の思考と行動に影響しているだろう。どのように評価できるだろうか。それを考えることも課題だろう。

本書の試みは素敵だ。医学教育における教養科目の授業の進め方は先生によって違うだろうと思うのだが、それぞれの工夫をお互いに参考にしながら、次の世代の医学生をしっかりと育ててほしい。自治医大では卒業式で、本書を巣立っていく学生一人ひとりに贈るといふ。時に目を通せるように、と、なかなかの配慮と言えよう。医科系大学・医療系専門学校の卒業生の、卒業直後数年のミッションを考えると、専門知識以外の授業での経験は医療現場で無意識のうちに活かされていくだろう。その中から、さらに次の世代の医学教育への意識も生まれてくるだろう。卒業生、そして担当の先生たちの今後の健闘を祈っている。

評者 ■黒川 清

東京大学 名誉教授

政策研究大学院大学 名誉教授